

平成 26 年度 「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」に関わる「プロジェクト型」の共同研究：研究成果報告書

研究課題名：「近代ロシア・プラトニズムに関する学際的研究」

研究代表者：下里俊行（上越教育大学・教授）

本共同研究の研究構成員（所属機関・職・役割分担）

下里俊行（上越教育大学・教授、研究総括およびロシア社会思想）

杉浦秀一（北海道大学・教授、ロシア法思想）

根村 亮（新潟工科大学・教授、ロシア文化史）

兔内勇津流（北海道大学・准教授、ロシア神学思想）

貝澤 哉（早稲田大学・教授、ロシア文学・美学理論）

北見 諭（神戸市外国語大学・教授、ロシア美学・文学理論）

坂庭淳史（早稲田大学・准教授、ロシア文学・思想）

鳥山祐介（千葉大学・准教授、ロシア文学・表象論）

望月哲男（北海道大学・教授、ロシア文学、アドヴァイザー）

本共同研究の研究協力者（所属機関）

金山浩司（スラブ・ユーラシア研究センター）

堀江広行（株式会社 JRB Inc.）

渡辺 圭（千葉大学）

斎藤祥平（北海道大学・大学院）

本共同研究の目的、先行研究と課題

本研究は、19 世紀初頭から 20 世紀初頭のロシア思想史上の特質の一つとされる「プラトニズム」を中核概念として、宗教・哲学・思想・文学・芸術・教育・政治社会運動の分野の幅広い文化史上の現象を対象にして学際的に分析することを目的とする。そのことにより、ソヴィエト期および現代ロシアの文化現象の研究に対してもより新しい解釈枠組みを提供することを展望した。

従来の研究では、ロシア思想・哲学・文学の様々な局面でプラトニズムが重要な役割を果たしていたことが指摘されてきた。しかしながら、先行

研究の動向を俯瞰する時に次のような諸課題が未解明である。すなわち、第1に、近代ロシア・プラトニズムの創生期にあたる18世紀後半の状況がほとんど未解明であること、第2に、19世紀前半と19世紀末とを連結する19世紀半ば以降のプラトニズムの動向分析が決定的に欠落していること、第3に、20世紀初頭に多様化・分岐していったソロヴィヨフ的プラトニズムが、その後、ソヴィエト時代の多様な分野での学者・文化活動家たちや国外に亡命した思想家たちにどのように継承されたのかという問題は依然として不十分にしか解明されていないことであった。

研究方法と対象設定

本研究は、啓蒙専制君主エカテリーナ2世（在位1762-96年）以降、スターリンが没する1953年までの時期を対象期間として、宗教・哲学・思想・文学・芸術・教育・政治社会運動の分野の幅広い文化史上の現象に内在するプラトニズム的要素を析出する。その際、検討対象とするテキストは、これまでの国内外のプラトニズム研究によって十分吟味されてこなかった影響力ある神学者・哲学者・思想家・作家・芸術家・教育理論家・社会政治活動家らによる書籍・定期刊行物によって公表された言説に限定する。具体的に集中的に解明すべき主題は、①18世紀後半のフリーメイソン由来の神秘主義思想と文学作品、②1840-50年代のスラブ派と西欧派の論争、③1860-70年代の大学・神学大学の哲学と初期ソロヴィヨフとの関連、④1860-80年代の文学作品・文芸批評、⑤ポスト・ソロヴィヨフ期の思想家（特にトルベツコイ兄弟、ロースキー、カルサーヴィン、フランク、ゼニコフスキら）、⑥19世紀末以降のロシア・マルクス主義とロシア正教神学、⑦ソヴィエト国内の文学・美学・言語・数学・科学哲学者の動向、である。

本共同研究の学術的な特色

本共同研究の最大の特色は、「プラトニズム」を中核的分析概念として、ロシア文化史上の幅広い現象を対象にして、従来の思想史・文学史研究の枠組みを超越するかたちで近代ロシア文化を根底において規定してきた構造的特質を解明しようと試みる点にある。そのことによって、従来、ジャンル別に叙述されてきたロシア文化史を内在的・統一的・構造的に把握することができるだけでなく、プラトンというヨーロッパ共通の知的遺産を媒介にして、

同時代のヨーロッパ・アメリカ文化史との共通の基盤でロシア文化史の特質を比較史的に解明することを可能になる。具体的には、18世紀後半の啓蒙思想および理神論、19世紀前半のカント以降のドイツ観念論および自由主義神学、19世紀半ば以降の自然科学的唯物論、実証主義哲学、ダーウィンおよびH. スпенサーの進化論、19世紀末以降の新カント派、ニーチェ、リッチェル神学、20世紀前半の存在論哲学への関心、すなわちフッサール、ハイデガー、ベルグソン、そしてホワイトヘッドのプロセス神学、さらにはカッシーラー（プラトニズムを鍵概念としたヨーロッパ思想史叙述）などと比較してロシア文化史を再読する可能性を与えてくれることで、従来、一国完結的に解釈されてきたロシア・ソヴィエト文化史の土台によこたわる深層レベルでのヨーロッパ・アメリカ文化史との相互作用あるいは対話構造に光を当てることができるはずである。

研究実施体制

研究実施体制としては、エカテリーナ2世時代からスターリン没までのロシア文化史における影響力ある神学者・哲学者・思想家・作家・芸術家・教育理論家・社会政治活動家らによる書籍・定期刊行物によって公表された言説を、研究代表者・研究分担者のあいだでそれぞれ分担して読解し、その結果を、年2回、スラブ・ユーラシア研究センターでの研究会で発表、討論した。そのうえで、検討対象のテキストにおけるプラトニズムの文化構造上の意味について共通理解を得ることに努めた。

研究成果の概要

本研究の結果、先行研究では未解明の課題の一部が解決され、より重層的で立体的なロシア・プラトニズムの諸相を浮かび上がらせることができたといえる。個別の成果については以下の通りである。

本共同研究の枠組みで実施された「プラトンとロシア」研究会での研究成果（日時、場所、発表者、発表題目、研究成果の概要、発表論文）は以下の通りである。

2014年8月28日（北海道大学・スラブ・ユーラシア研究センター）

鳥山祐介「エカテリーナ二世時代のプラトン受容とシチェルバートフ―「魂の

不死に関する対話」(1788) とその背景」

エカテリーナ二世時代のプラトン受容史としてノヴィコフの雑誌『朝の光』でのプラトンの翻訳、パホモフ、シドロフスキーによるプラトン作品集を紹介し、プラトンの哲人政治論がエカテリーナ二世の称揚のために援用されたことを指摘した。さらに、シチェルバートフの『魂の不死についての対話』が、実は女帝アンナによって処刑されたヴォルィンスキーに捧げられた側面があり、「魂の不死」の主張を通じて、彼が、ソクラテス、イエスといった咎なくして不正に殺された者達と重ねられていた可能性があることを指摘した。全体としてわが国では画期的な 18 世紀プラトン論である。

下里俊行「ニコライ・ナデージュチンの民族学研究におけるプラトニズム」

ナデージュチンの民族学研究の分析を通じて、人類の神的アイデアへの接近の思想が、社会的・地理的な意味での底辺の群衆に「ナロード」の名を与えることによりその者たちを全人類性へと統合するためのプロジェクトとしての民族学による「ナロードノスチ」研究へと具体化していった思想発展の道筋を指摘した。19 世紀前半の神秘主義的啓蒙思想と 19 世紀半ば以降のロシアの民族的個性の思想とを媒介する思想家としてのナデージュチンの思想の意義を明らかにした。

2014 年 8 月 29 日 (北海道大学・スラブ・ユーラシア研究センター)

金山浩司「宇宙を鳴りやませよ：20 世紀物理学におけるピュタゴラス主義とソ連における反応」

ピュタゴラス主義、ケプラー、ゾンマーフェルトにおける、宇宙に内在する調和的秩序あるいは秘数術的思想が、20 世紀 30 年代のエディントンにおいて宇宙＝交響曲というイメージとして継承されたことを指摘したうえで、雑誌 Nature 誌上でのエディントンの思想をめぐる論争を踏まえて、ソ連共産党理論誌『マルクス主義の旗のもとに』で展開されたコーリマンによるエディントン批判「宇宙を鳴らすのをやめよ！」を紹介した。経験的な方法では解明されない宇宙の起源に関する現代の未解明の謎に対して、プラトンが提起した示唆の意義は小さくないのではないかと指摘した。ロシア・プラトニズムに対するソ連科学史の分野からの全く新しいアプローチとして高く評価された。

2015年3月6日（北海道大学・スラブ・ユーラシア研究センター）

坂庭敦史「シェヴィリョフ『詩の理論』におけるプラトン、アリストテレス—スラヴ派か官製国民性か」

シェヴィリョフの『詩の理論』の背景を分析し、彼がプラトンの「詩人追放論」を解釈する際に、無条件の真理とは区別される「ローカルな真理」の存在を主張した点に注目し、彼がイデアリストのプラトンと、リアリストのアリストテレスとの和解を志向したこと、したがって、全体としてアリストテレス的な志向の影響が強いことを指摘した。さらに、そこから彼が国家による教育という課題に向かった道筋を解明し、そこに彼のウヴァーロフと親和的な保守思想への傾斜を見出し、これに対立する位置にプラトンの志向を維持したスラヴ派を位置づけた。古代ギリシャ哲学者の読解が同時代のロシアの哲学思想的な布置関係に連動していることを明らかにした。

堀江広行「初期セルゲイ・ブルガーコフのドストエフスキー受容によせて」

『経済の哲学』以前のブルガーコフの思想形成を解明するために彼によるドストエフスキーの読解を分析した。その結果、ブルガーコフにとってドストエフスキーは彼の無神論的社會主義批判において強い役割を果たし、その後の積極的なソファア的世界像を準備するうえでも重要な役割を果たしたことを指摘した。

渡辺圭「現代ロシア聖職者における神智学批判—長補祭アンドレイ・クラエフの護教論」

現代ロシアの聖職者クラエフの思想を分析し、彼が、神智学および東洋の神秘思想とキリスト教との相違を鋭く指摘し、両者の安易な混淆を拒否したことを指摘し、現代ロシア正教聖職者による「キリスト教」理解の一側面を解明するとともに、彼らの危機意識の背後にあるプラトニズム的思想傾向を析出した。

2015年3月6日（北海道大学・スラブ・ユーラシア研究センター）

北見諭「持続の知性化とアンチプラグマティズム：セミヨーン・フランクのベ

ルグソン解釈をめぐる」

フランクの思想がベルグソンの外見をとりつつも、実際にはベルグソンとは異質なものを導入しており、ベルグソン哲学とは明確に異なった内容をもっていることを指摘した。そのことにより、フランクが、時間的な生成と超時間的なアイデアという二つの対立する契機を統一させようとするロシア・ルネサンスの思想に共通する志向を潜在させていたことが明らかになった。その結果、フランクの論理は不可避免的に矛盾や飛躍を含むことになったが、その問題性にベルジャーエフがすでに気づいており、彼はこの問題性を流出と創造の対立として定式化したことを指摘した。

齋藤祥平「トルベツコイの思想の背景とユーラシア主義の胚胎」

ニコライ・トルベツコイの『民族誌学評論』における論考を対象に、彼の民族誌学研究や雑誌の思想的背景を分析した。そこに反社会ダーウィン主義、反ヨーロッパ中心主義の特徴を見出すとともに、トルベツコイの学問的指導者達の動向を概観し、トルベツコイのユーラシア主義の形成につながる諸要因を解明した。その結果、ユーラシア主義の立体的・重層的理解を促進した。

兎内勇津流「『ステファン・ヤヴォルスキーとフェオファン・プロコポーヴィチ』に見るユーリー・サマーリンのキリスト教観」

サマーリンがモスクワ大学に提出した学位論文『ステファン・ヤヴォルスキーとフェオファン・プロコポーヴィチ』におけるキリスト教観を分析した結果、彼が神的世界観を維持しようとする強い志向をもっていたことを明らかにし、そこにトクヴィルと共通した問題意識を見出した。ロシアのスラブ派を宗教と政治をめぐるより普遍的な文脈で位置づけようとした試みである。

研究成果の発表（予定）

下里俊行「『望遠鏡』編集発行人ナデージュデンの永遠・時間・歴史概念」『ロシア語ロシア文学研究』第46号、1-17頁、2014年。

下里俊行「1830年代のロシア保守思想家達の「ナロードノスチ」概念の再検討」『ロシア史研究』第95号、3-26頁、2014年。

- 下里俊行「近代ロシア正教聖職者教育におけるプラトン主義の起源：ペテルブルク神学大学招聘教授フェスラー追放事件を中心に」『スラヴ研究』第62号、2015年、刊行予定。
- 貝澤哉「グスタフ・シペート「解釈学とその諸問題」における解釈学的哲学の構想：意味の社会的存在論にむけて」『スラヴ研究』第62号、2015年、刊行予定。
- 北見諭「持続の知性化とアンチプラグマティズム：セミョーン・フランクのベルグソン解釈をめぐって」『神戸外大論叢』第65巻第2号、25-49頁、2015年。
- 北見諭「全一体におけるイデア的なものと時間的なもの：セミョーン・フランクの『知識の対象』におけるフッサールとベルグソン」『スラヴ研究』第62号、2015年、刊行予定。
- 坂庭淳史「1830年代ロシア文学の理想と現実—スタンケーヴィチとベリンスキー—」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第60輯第2分冊、83-98頁、2015年。
- 兔内勇津流「スラブ派と19世紀ドイツ神学」、日本ロシア文学会北海道支部・研究報告会、2015年7月11日、発表予定。
- 渡辺圭「現代ロシア正教聖職者の護教論：長補祭アンドレイ・クラエフの神智学批判書における「神なき宗教」」『ロシア語ロシア文学研究』第47号、2015年、刊行予定。
- 斎藤祥平「N. S. トルベツコイと亡命ロシア世界：ユーラシア主義を中心に」（北海道大学文学研究科・博士論文：博士学術、2015年3月25日）